



UR都市機構 小野理事長

1月31日（火）東京国際フォーラムにて債券投資家、アナリスト、借入金機関等を対象に投資家等説明会を開催しました。UR都市機構設立以降、昨年1月並びに7月に続いての開催となり、今回は約90社、140名と多くの機関投資家等の参加がありました。

説明会では、はじめに小野理事長から当機構の現況及び将来の経営見通しについて説明を行いました。トップ自らが投資家の皆様に直接お知らせすることで、非常に高い関心が寄せられました。

続いて田中経理資金担当理事からニュータウン業務における土地の供給・処分状況等を中心に、経営改善計画の進捗について、また平成17年度決算見込み及び平成18年度予算案・資金調達計画について説明を行いました。決算見込みの説明は公的機関ではあまり行なわれておらず、民間により近い経営体としての取組みと評価されました。

このようにIR活動を通じて機関投資家等の皆様に当機構についての理解を深めていただき、ひいては円滑な資金の調達および調達コストの低減に繋がれるよう、今後も取り組んでいきます。

（平成18年度予算については、21ページをご覧ください。）

経営改善に向けた総合的な取り組みが高く評価され、下記の格付けを取得しています。

格付け投資情報センター（R&I）
2005年1月13日：AA
日本格付研究所（JCR）
2005年4月20日：AA
ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク
2005年2月17日：A2

投資家等説明会開催



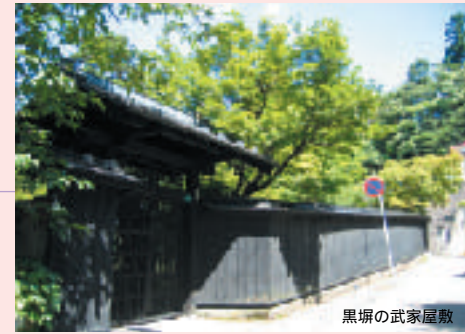
「都市デザイン」ホームページ開設

UR都市機構では、景観法の施行など高まってきた都市デザインの重要性に対応し、平成17年に都市デザインチームを組織しました。

現在、コーディネートやプロジェクトを通じて、質の高い景観づくりに取り組んでいます。この度、都市デザイン・景観に対する取り組み、専門家のインタビュー、トピックス、景観賞の紹介などを盛り込んだホームページを開設しました。ぜひご覧ください。

www.ur-net.go.jp/urbandesign/

長年、仕事で通い慣れたまちがある。秋田県湯沢市がそのひとつだ。秋田や新潟は美味しい米と水による酒どころとして知られるが、湯沢は東の灘といわれるほど酒づくりが盛んなまち。「あなたは美味しいお酒のあるまちの仕事が多いわね。」とよく笑われた。なぜか美味しいもの素敵な人がいるまちと長くおつきあいすることになってしまったのだ。湯沢市は、佐竹藩南家の城下町で、北家角館ほどではないが黒塀の武家屋敷がわずかに残る。そして雄物川源流の院内銀山を有し、そこへ物資を運ぶ拠点がある。院内銀山は江戸時代、大相撲や人形浄瑠璃など日本中のあるゆる芸能興行でにぎわい、全国から美味しいものが集まった。詳細は当時、銀山で医者をしていた門屋養安の日記から明らかに。養安先生は遠くから取り寄せた果物や珍味、酒を楽しむグルメだったそう。養安日記の研究をされている田沢湖芸術村の茶谷十六研究員からは隣接する羽後町にある西馬音内盆踊りの衣装や振りつけにも、銀山に集まった芸能の系譜があると伺う。さらに私は、湯沢の酒の生産量と味を支えたのは院内銀山だったと市内の酒蔵の女性



黒塀の武家屋敷

蔵人からお聞きすることになる。その蔵人や民話の語り部、農家や旅館業の人たち二十人ほどで「方言を使ったサービスマニュアルづくり」をはじめたころがなつかしい。佐竹南家は京都からお姫さまを迎えたり、北前船による交流もあって、方言からは京言葉が匂い立つのが特徴で、マニュアルはそうした語尾が優しい京言葉をサード・ビスに生かそうというものだった。金沢に移り住んで感じるのは日本海側の豊かさである。湯沢市も地味の豊かさとして銀山に集まる全国の人の舌に鍛えられて生産技術が発達したのか、魚介類や水に加え、野菜、果物の美味しさは都会人の想像を絶する。スーパーマーケットに並んでいるトマトは、同じトマトなのに似て非なるもの、抜群に美味しい。二〇〇四年八月、湯沢市は七夕絵灯ろう祭りを迎えようとしていた。北東北の灯ろうは独特で、湯沢市では大きなものは畳一畳分もある四角い箱に美人画が描かれている。夕方、火がともった灯ろうの美女が私に微笑みかけてくる。市内の主な通りは幻想的な空間に変わり、そのとき私は、幼いころ中国山地の山の社で見た祭りを思い出していた。まったく異なるものなのだが、神秘的な時空は同じだった。そしてデジャヴ（既視感）と思ったのだ。次の日私は、佐竹南家の菩提寺清涼

“なつかしい”に出会うまち
DNAのデジャヴが観光？



湯沢市七夕絵灯ろう祭り ©湯沢市

寺を訪れる。苔むした石塔が並び威容は、日光徳川家の墓所を小さくしたような場所である。階段を下り、武家屋敷の黒塀のなかへ。真夏の太陽が照りつけ、頭が朦朧としていたのかもしれない。黒い空間に囲まれたとき私は再びなつかしい感覚、デジャヴを感じた。観光とはなつかしい風景に出会うことだと思ふ。つまり観光とは場所を移



佐竹南家の菩提寺 清涼寺



犬っこまつり

麦屋弥生

むぎややまこ

プランナー 元財団法人交通公社主任研究員
1980年、東京生まれ、津田塾大学卒業後、財団法人交通公社で国内観光地の調査・研究を行う。
2004年から、フリーで各地の観光地づくりのアドバイザーや企業の広報業務等に開く。主な著書は「観光読本（東洋経済新報社）」「魅せる農村景観」（きょうせい）、「金沢百八景」（福嶋文庫）。



動するだけではなく、時間を旅することなのだ。それは自身が体験した風景とは限らない。日本人としてのDNAがなつかしいと感じるのだから。なつかしいから、古いから良いといっているわけではない。いや、今あえて良いといいたいのだ。まちづくりで困ったときはなつかしい昔の風景を思い出して、その再生を検討してみてもいいかと地方都市に主張したいのである。